

# TENNOZ TWILIGHT

天王洲トワイライト

Scenario & Text : Makoto Nishie 西江まこと  
Illust : Akane Ukon 右近 茜  
Photo Credit : La Casa NIKI

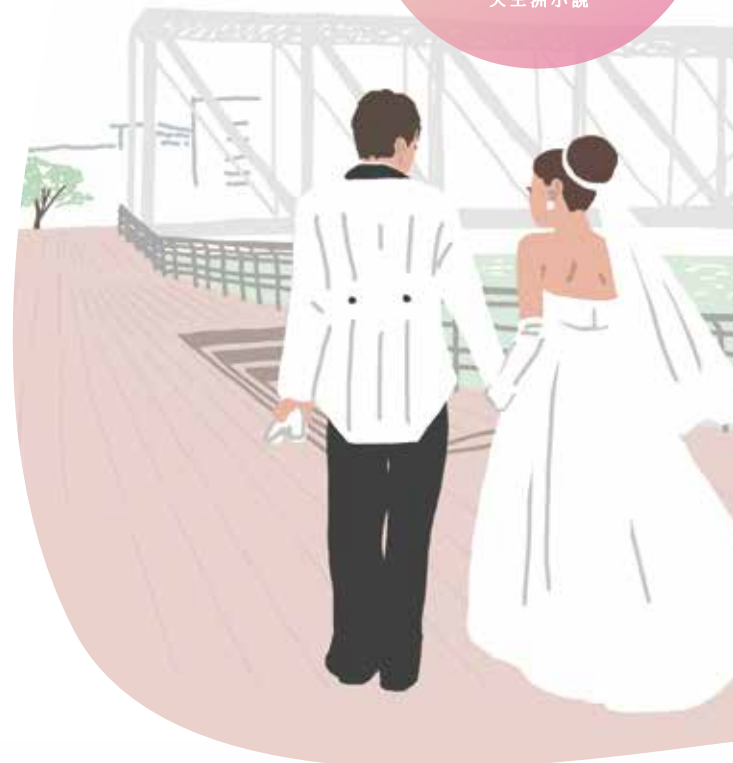
TENNOZ ISLE  
WATER FRONT LIFE  
MAGAZINE

KAZE SORA

[ 連 載 ]

TENNOZ STORY

天王洲小説



春一番が去り、天気がよく、暖かい。そして、春のせいかな、今週から私の週末は結婚式ラッシュだ。明日の二次会会場は、天王洲アイル。今日のうちにドレスを取りにいかねばならない。

白金高輪のマンションから、実家がある泉岳寺への道のりにあるクリーニング屋には、ずいぶん昔から通っていて、ドレスを預ける度に「早く璃子ちゃんの花嫁姿も見てみたいわ」と言われる。おばちゃんの家は、ふたりとも息子だから、幼なじみの私のドレス姿を見たいのだと言ってくれる。でも、いつの間にか33歳になってしまったし、私の身近には恋愛らしいことが

とも会えていなかったの」

「開業準備も忙しいでしょう。お腹ももうこんなに大きいし。順調なの？」

「うん、赤ちゃんは元氣。まずは亮介一人でできる分だけ始めてもらうつもり」

二人はパティシエだ。亜紀の実家の一角を改装して、店舗にするのだと、母から聞いている。

「そういえば、アキヒロには会った？」

「まだ。昨日、おばちゃんには会ったんだけど」

「随分、時間がたつたから、いいかなと思つて。大丈夫だったかな」

「もちろん。もう、10年以上前の話よ。気にしないで」

本当は、気にしていた。

ころころと、私の周りに恋の話がころがっていた頃のこと。私たちはまだ高校生で、付き合っていた。幼なじみ同士が付き合えば、それはなんだかあまりにも刺激がなさ過ぎて、私はアルバイト先の先輩に恋をしてしまった。それ以来、私たちは話していないかった。

二次会では、涙が止まらなかった。二人が小さい頃の映像には、私やアキヒロも映っていた。結婚式の様子が映れば、両家のご両親が、随分歳をとつていて、当たり前のことなのだけれど、なんだか切なくなつて、また泣いた。

「こちら、どうぞ」



## La Casa NIKI

ラ・カーザ・ニキ

運河を望むキャナルガーデンで  
素敵なオリジナルウェディングを

美しい運河を望む広大な石量のガーデン。この素晴らしいローケーションを使った、ガーデン挙式やデザートブッフェ、ダンス、バンド演奏、バルーンリリースなど多彩な演出が魅力の「ラ・カーザ・ニキ」。ゲストとの距離を感じさせることのない、アットホームなオリジナルウェディングを叶えることができる。

☎0120-44-6633(10:30~19:00・無休)  
品川区東品川2-2-24天王洲セントラルタワー キャナルガーデン1F

【ランチタイム】月~金/11:30~14:30(L.O 14:00)  
【ディナータイム】各種会合にご利用可能(貸切専用/30名様~)  
【ブライダルデスク】無休/10:30~19:00(年末年始を除く)

東京モノレール「天王洲アイル」駅中央口、約3分  
りんかい線「天王洲アイル」駅 B出口から徒歩約5分  
<http://www.cordon-bleu.co.jp/niki/>

会場スタッフが、大泣きしている私を見かねて、ティッシュを差し出す。アキヒロが、隣のテーブルから、こちらを見ている。テーブルに丸めたティッシュを並べて、目を真っ赤にして。

私たちは、笑った。

三次会には行かなかった。新郎新婦に見送られ、「幸せにね。近所なんだから、また、すぐ会えるね」と私は言い、「赤ちゃん生まれたら、すぐ連絡する」と亜紀は言った。ちよつぱりふくよかになった亜紀は、本当に、幸せそうだった。真っ白いドレスが、夕暮れを映す。天王洲の運河は、夕方になると、風いでした。

二人が入場まで歩いてきたボードウォークを歩いて、ふれあい橋を渡る。

「帰るなら、一緒に歩いて帰ろう」

振り返ると、アキヒロが息を切らしていた。泣き疲れたから、帰ることにしたとい

い。同級生の亜紀と亮介は、私たちが生まれた年にできた地元の高輪協会で式を挙げ、二次会海の近くで天王洲アイルを選んだ。亜紀の真っ白なドレスは、ぼつこりとお腹が膨らんでいて、ふたりは私を見ると、照れくさそうに笑った。東京で育った二人は、修業先のフランスで恋に落ちた。なんだか、今の私には、ロマンティックすぎて、映画のように思えてしまう話だ。実は、近所でもある天王洲アイルなのに、この「ラ・カーザ・ニキ」という南欧風のレストランも、まるでその舞台のように見えた。

「璃子、久しぶりね。日本に戻ってから、誰

う彼と私は品川方面へ並んで歩く。私は、何を話したらいいのか、わからなかった。アキヒロは、何を話そうか、一生懸命考えているみたいだった。

「天王洲アイルに来たの、覚えてる？」

「うん、覚えてる。昔、よく来たよね」

私たちは、桜の季節になると、よく目黒川沿いを散歩した。暗くなるまで歩いて、気づくといつも、天王洲アイルだった。

ここは、私たちにとって、近所の街なのだけれど、当時、天王洲アイルという地名から、アーバンリゾート、だなんて言われはじめ、高校生にとっては随分遠くまで歩いて来たような気がしていた。

今年も、もうすぐ桜が咲くだろう。

「桜の季節に、また来ようか」

風は、すっかり止んでいて、ころころ、と恋がころがりはじめる音が聞こえた気がした。

